

香川大学 大学教育基盤センターNEWS

No.21 令和7年12月

*Higher Education Center
Kagawa University*

香川大学 大学教育基盤センター
〒760-8521 高松市幸町1-1
Tel 087-832-1151～1154
Fax 087-832-1155
<https://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/>

目 次

1. 就任および退任のご挨拶.....	1
2. 第72回中国・四国地区大学教育研究会報告.....	5
3. よりよい授業のためのFDワークショップ報告.....	10
4. 注目のFDのご紹介.....	12
5. 全学共通科目の授業公開報告.....	14

1. 就任および退任のご挨拶

大学教育基盤センター長 岡田徹太郎



このたび、2025年10月1日付で大学教育基盤センター長を拝命いたしました。2017年度に科目領域選出コーディネーターを務めたことをきっかけに、2020年度から地域教育部長、2024年度からは調査研究部長を務め、大学教育基盤センターとの関わりを深めてまいりました。その間、センター長であった前任の高橋尚志教授からご指導を賜りました。センター長職を引き継いで一ヵ月余り、その責任の重さを感じております。

香川大学の全学共通教育は、学位授与方針（DP ディプロマ・ポリシー）に準じた共通教育スタンダードを置き、これに沿った科目群を用意しています。さらに、大学教育基盤センターは、2018年度に香川大学で始まったDRI教育の全学的展開を牽引してまいりました。Dはデザイン思考、Rはリスクマネジメント、Iはインフォマティクスを指します。私たちは、順次、D科目・R科目・I科目を増やしてきました。

D（デザイン思考）は課題発見・解決のプロセスを通じて、新たな価値を生み出す力を育むもの、R（リスクマネジメント）は防災・減災や災害補償を視野に入れ、レジリエントな社会の構築を目指すもの、I（インフォマティクス）は数理・データサイエンス・AIなど、情報社会に対応する力を育成するものとして展開してきました。

全学共通教育では、教員の専門分野が多岐にわたるという特徴が以前からありました。私は、これからは学生の多様性に、より注目を向けなければならないと考えています。特に、共通教育スタンダード（c）「21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に基づく「主題科目」や「D科目」における課題発見・課題解決のワークを通じた、学生同士が互いに学び合い、気づきを共有することが、これまで以上に重要であると考えております。

全学共通教育では、文系3学部・理系3学部の6学部全ての学生たちが一緒に学びますが、文系・理系の学生の思考法には、それぞれの特徴があります。全学共通教育での実践を続けて私が気付いたことは、学生同士が対話を続けることによって、異なる学問分野への関心が増し、視野を広げるというジェネラリスト性が高まることがあります。

一方で、こうした学びは、自身の専門領域の相対的位置づけを理解する契機にもなります。それは、自身の専門課程に対する興味関心を強くし、スペシャリスト性を高めることに繋がります。香川大学生は、ジェネラリスト性とスペシャリスト性の両方を身に付けることになるわけです。

学生諸君が香川大学での教育成果=DRI能力を身に付けて大学を卒業して社会に羽ばたいており、その成果はすでに現れ始めています。最近では、2025年6月に発表された日本

経済新聞社と日経 HR による「企業の人事に聞いた卒業生が活躍している大学調査」で香川大学が中国・四国地域ランキングで 1 位、全国ランキングで 22 位となったことが挙げられます。

学生の多様で深みのある学び合いを支えるため、大学教育基盤センター長として、引き続き全学共通教育の意義を高めるカリキュラムの編成と実践に努めてまいります。今後とも、皆さまのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大学教育基盤センター副センター長 三宅岳史



2025 年 10 月 1 日より副センター長を拝命いたしました。岡田徹太郎センター長より本職の打診を受けましたときに、これからはもう前任者の先生方——とりわけ高橋尚志前センター長や寺尾徹前副センター長に頼ることもできなくなるのだなと身の引き締まる思いをいたしました。

日々の業務のなかでは言われたことをこなすことが増えてきていますが、全学共通教育のスタッフとしては、香川大学の教養教育について日ごろから自由闊達に議論して進む方向性を自主的に話し合ったことは、大学人の在り方として自らの指針ともなっています。第四期中期目標・中期計画で最終的に「学び心を起動する」という形で全学共通教育の改革がまとまっていたのも、教育戦略室からの答申という形をとってはいましたが、そのような自主的な議論が最大限に生かされた結晶だと思っています。

今後はまた第五期の中期目標・中期計画といった仕事が目前に迫りつつありますが、大事なのは改革のための改革なのではなく、本当に必要なことや本質的なことを言語化して共有し、それを実施できる形に落としていくことなのかなと思います。そしてそのために必要なのは引き続き、諸先輩方から受け継いだこの貴重な環境を活用して、次へとつなぐことだと思っています。

副センター長の役目というのもはつきりとした形では外からは与えられていないのですが、おそらくそんなところにあるのではないかと（都合よく？）解釈しまして、以上を就任のあいさつに代えさせていただきます。

創造教育推進部門長 宮崎英一



このたび、香川大学大学教育基盤センター創造教育推進部門長を拝命しました。2019年10月に旧ICT教育部長として教育ICTの運用整備に携わり、続く数理情報・遠隔教育部長として、数理・データサイエンス・AI教育に携わって参りました。この時にちょうど新型コロナウィルス感染症が発生し、対面教育から遠隔教育への移行、遠隔教育環境の整備等では大変多くの先生方、また事務の方にも非常事態という事でかなり無理なお願いし、何とか対応してきました。関係の皆様には改めてお礼申し上げます。

今回、創造教育推進部門長を拝命致しましたが、創造教育推進部門の役割は、本センター内の能力開発部、地域教育部、数理情報・遠隔教育部を統括的にコーディネートしてDRI（デザイン思考・リスクマネジメント・インフォマティクス）教育を全学的に波及・展開されることです。ただ、DRI教育を学内で展開するためには、全学の教職員からDRI教育に対する理解と協力を得なければなりません。そのため、DRI教育やアクティブラーニングに関するFDプログラムを開催し、DRIを通して、あらゆる人間が安心して生活できるイノベーションを創造する人材となるDRIイノベーターを育てるDRIイノベーター養成プログラムの展開を目指していきます。

これから創造教育推進部門長として、本学のDRI教育がより発展・深化していく上で皆様のお力添えが必要かと思います。今後とも創造教育推進部門を宜しくお願ひ致します。

教育学部教授 高橋尚志



香川大学大学教育基盤センター長退任にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

在任中は、多くの先生方、職員の皆様、そして学生の皆さんに支えられ、教育改善や学修支援の取り組みを進めることができました。ここに心より感謝申し上げます。

本センターでは、大学教育の質保証、授業改善支援、FD活動の推進などを通じて、香川大学の教育基盤をより強固にすることを目指してまいりました。これらの成果は、決して一人の力ではなく、皆様のご協力と熱意によって成し得たものと深く感じております。

振り返れば、2006年に運営委員としてセンターに関わり、その後共通教育コーディネー

ター、2014年には共通教育部長を務めました。当時は教育担当理事がセンター長を兼務されていたため、共通教育部長が副センター長を担い、その後業務量の増加に伴い専任のセンター長が置かることとなり、2017年に拝命いたしました。起点がどこかわからないですが、共通教育部長（副センター長）から数えて12年、センター長の辞令をもらってからも8年の歳月を過ごすことができました。このように長く務めさせていただいたことに、感慨深いものがあります。

在任中には、学生の学びの歪みを是正すべく、第三期中期目標期間での大改革、さらに第四期開始時の「学び心を起動する」改革に携わりました。これらの取り組みは全国的にも高く評価され、全国規模の会議で招待講演の機会を幾度かいたしましたことは、私にとって大きな喜びであり、忘れ得ぬ経験となっております。今後は立場を変え、一教員として新センター長の岡田先生をはじめ、教職員の皆様とともに力を尽くしてまいる所存です。

最後に、これまで長きにわたり支えてくださったすべての教職員の皆様に改めて厚く御礼申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

教育学部教授 寺尾徹



このたび、大学教育基盤センターの副センター長を退任することになりました。長く務めてきた大学教育基盤センターでの仕事も一区切りとなります。高橋センター長のもとで共通教育部長としてかかわらせていただいた全学共通教育改革にかかわる仕事が最も印象に残ります。学生を活性化するために必要なことは結局のところ学問そのものが持つ魅力であること。教員の教育意欲はやはり学問の魅力を若い学生たちに伝えたいと思う心であることを示すことができたと考えています。「学び心を起動する」「教え心を起動する」ことを、私もどこの部署にかかわるにしてももっとも重要な原点として大切にしていきたいと思います。

VUCAといわれる時代だからこそ、過去の膨大な知の資産が古びることなど絶対になく、それらは適切な批判的継承によって指針となることを確信する、そんなスタッフがいっぽいかかわっている、香川大学大学教育基盤センターの一層の発展を期待しています。

最後に、常に働きやすい環境を作ってくださった歴代の事務方の皆様に心よりお礼の言葉を述べ、退任のご挨拶とします。

2. 第72回中国・四国地区大学教育研究会報告

第72回中国・四国地区大学教育研究会が、令和7年6月14日（土）に開催されました（当番校島根大学、オンライン）。メインテーマ「教養教育と総合知の涵養」のもとで、基調講演・3大学の事例紹介・分科会が執り行われました。以下、研究会の様子を、参加した本学教員が報告します。

■基調講演

新潟大学副学長の福島治先生より、「知識集約型社会における新潟大学の挑戦：メジャー・マイナー制の戦略的全学展開」と題して基調講演がございました。新潟大学には、全学分野横断創成プログラム（NICE）があります。このプログラムでは、専門分野（メジャー）に加えて副専攻（マイナー）を履修することで、幅広い知識を身につけることができます。基調講演では、プログラム概要についてご紹介があった後、アカデミック・アドバイジング、学生の学修事例、マイナー・プログラムの周知、マイナー・プログラムの質保証、事業の実施運営・組織体制、ミッションについてご説明がありました。本学の状況に照らし合わせ、最も印象に残ったのは、アカデミック・アドバイジングのお話です。アカデミック・アドバイジングとは、「学生自身による将来の目的・目標の決定とその達成に向けて、担当者が途中段階のアセスメントを行いながら学生個人のニーズに沿った支援をすること」（日本アカデミック・アドバイジング協会）を指します。新潟大学では、プログラム特任教員やSAによる学修支援が行われています。本学のネクストプログラムの実施においても参考になる、学生の学習意欲を継続させるための取組だと思いました。

（文責：西本佳代）

■3大学の事例紹介

基調講演では、新潟大学の全学分野横断創成プログラム（NICE）についてご紹介がありました。その基調講演の内容を受け、広島大学、山口大学、香川大学から、文理横断・文理融合教育の推進について、事例紹介がありました。広島大学からは、「広島大学における文理融合教育と総合知」と題して、総合科学部総合科学科長の坂田桐子先生よりご報告がありました。山口大学からは、「山口大学のSTEAM教育」と題して、教育・学生支援機構教育支援センター長の野崎浩二先生よりご報告がありました。そして、香川大学からは、「香川大学「DRI教育」の展開について」と題して、大学教育基盤センター共通教育部長の三宅岳史先生よりご報告がありました。3大学の事例紹介からは、各大学ともに文理横断・文理融合教育の推進に力を入れていることがよくわかりました。その一方、アセスメントの難しさ、人材確保の必要性等の課題も語られ、さらなる改善が期待されていることも共有されました。

（文責：西本佳代）

■人文・社会科学分科会

本分科会では、当番大学の関係者を含む約 15 名の参加者で実施されました。島根大学法文学部の飯尾公央教授の司会で、冒頭、参加者全員が簡単に自己紹介を行いスタート致しました。次に、島根大学の「クロス教育」の取組概要の紹介に加え、具体的な事例として広島大学の教養教育での取組（「展開ゼミ」、「大学教育入門」）、本学での取組（「ネクストプログラム」、「越境する学問」の授業）の紹介がなされました。本学からは、西本佳代准教授を中心に蝶も補足させて頂きながら話題提供を行いました。文理融合教育、分野横断教育の重要性や充実は喫緊の課題であり、初年次学生にどのような動機付けを行っていくのか、そこからどのような専門的な学びにつなげていくのか、学生側の問題であると同時に各授業や教育プログラムを企画し、運営する教員側の問題であることが挙げられました。一方で、人的・物的リソースが十分に整備されない中、持続的かつ継続的な人文・社会科学の教養教育をいかに推進していくのか、その課題についても参加者で共通に挙げられたと感じました。こうした各大学の担当教員の情報共有の場や機会を通じ、学生が最大限に修得できる「総合知」を引き続き模索していく示唆を得られたと思います。

（文責：蝶慎一）

■自然科学分科会

第 72 回中国・四国地区大学教育研究会分科会②自然科学分科会「テーマ：地域自然・地域資源を活用した総合知・フィールド教育を例に」のテーマで松本一郎教授（島根大学・教育学部）の講演を拝聴しました。ここでは、「山陰の豊かな自然を活かした小中学校の理科野外学習プログラムの研究と開発」と題して、20 年以上にわたる幼稚園・小学校・中学校の園児・学生を対象とした川の流れ・石・泥団子をキーワードとした自然科学教育でのフィールドワークの取組みについてご紹介頂きました。幼稚園の園児に対しては泥団子を作るところから、自然に触れてもらって、どうやったらきれいな硬い泥団子ができるのか？皆に興味をもってもらえるような教え方についてご教示頂きました（推論・探求心への関心・育成）。また小中学生に対してはこのフィールドワークを通じた自然科学の楽しさを学ぶとともに、“心からその場所を好きになる”、地域理解にも繋がる教育方法を本講演から学ぶことができました。参加者は 10 名弱と少ない参加者ではあったものの、極めて有意義なご講演であり、地域理解・地域貢献にも根差した大学教育の重要性を改めて認識することができました。

（文責：松本洋明）

■情報教育分科会

本年度の情報教育分科会では、「大学での数理・データサイエンス・AI 教育の現状と今後の展望」というテーマの下、文部科学省による政策的取組や、各大学における教育実践の共有を通じて、現状と課題、今後の方向性について意見交換が行われました。まず今川新悟専門官（文部科学省高等教育局）より、「AI 戦略 2019」や「MDASH 認定制度」の概

要と、2025年度の目標達成に向けた取組が紹介されました。原本博史先生（愛媛大学）、兵藤史武先生（川崎医療福祉大学）、瀬戸和希先生（島根大学）による実践報告では、各大学でのリテラシーレベルおよび応用基礎レベルにおける教育提供の実態や、地域の自治体や企業との連携の課題などが示されました。質疑応答では、生成AIに関する問い合わせをきっかけに、情報教育における倫理的視点の重要性についても活発な議論が展開されました。さらに、2025年以降の情報教育の方向性、地域の高校・企業・自治体との連携の在り方、持続可能な教育体制の構築、そして学んだ知識を実践に結びつけるための「問い合わせ立てる力」の育成といった論点について、参加者間で有意義な意見交換が行われました。

（文責：藤澤修平）

■外国語（英語）・外国語（初修）合同分科会

外国語合同分科会のテーマは「グローバル時代の教養としての外国語教育」でした。英語に関する発表は、前半の第1、第2、および第3の発表であり、島根大学外国語教育センター長の岩田淳氏の司会進行により行われました。第1の発表は、島根大学外国語教育センターの玉木祐子特任講師による「学生が授業する？Miroを使用したピアティーチングの試み」でした。玉木氏は、医学部の授業においてデジタルホワイトボードツール「Miro」を用いた教育実践について報告しました。Miroの活用により、授業内でのリアルタイムな意見共有やディスカッションが可能となり、学習の可視化および学生の参加意欲の向上が図られました。第2および第3の発表は英語によるものでした。第2の発表は、島根大学外国語教育センター講師の Tu Stachus Peter 氏による「Bridging Communication Gaps: The Role of Icebreakers in Supporting Interaction in English Speaking and Writing Classes」でした。Tu氏によれば、アイスブレーカーは学生の不安を軽減し、英語使用への意欲を高めるのに有効であると述べました。第3の発表は、島根大学外国語教育センター准教授の岡本マイケル氏による「Using ChatGPT in the EFL Classroom」でした。岡本氏は、学生の批判的思考力および倫理的なAI利用を促進しながら、AIを言語学習に統合するための実践的な提案を紹介しました。

（文責：Willey, Ian David）

■外国語（英語）・外国語（初修）合同分科会

外国語（初修）に関する発表は、第4～第6の発表でした。第4の発表「初修中国語教育における〔総合知〕涵養の可能性—言語から越境的思考へ」は、島根大学外国語教育センターの王欣（ワン・シン）特任講師でした。王先生は「初修中国語」がどのように「総合知」を育むのか、実際の教室現場から生まれたユニークな取り組みを紹介しています。中国語は多くの日本人学生にとって完全な未知の外国語であるので、異文化の「不思議」に出会う機会となります。一、最初の壁—「興味」の扉をどう開くか。二、発音の壁—「安心感」と「自信」をどう育むか。三、成長の壁—「踊り場」で挫けそうになったら。四、「主体性」—受身の学習からどう脱させ、本質を見抜く力を養うか。五、「問い合わせ」の壁—

「答え」が溢れる時代に、いかに「良質な問い合わせ」と「自分ごと」の探求を促すか。発表は初修外国語教育が持つ新たな可能性を明らかにし、教養教育における言語学習の新しい魅力を提示しています。

第5の発表「初修中国語における漢字教育について:日本と中国の漢字教育を中心に」は島根大学外国語教育センターの岡村宏章教授のプレゼンテーションでした。岡村先生は、日本と中国における漢字教育の目標、内容、方法、段階、資源、評価などの側面から比較分析を行い、両国の漢字教育の特徴と違いを明らかにします。日本と中国の「教育目標の違い」、「漢字教学内容の比較」、「教学方法の特徴」、「教育段階の構成—①小学段階、②中学段階、③高校段階」、「教育資源と評価方法」、「漢字教学の課題」、「課題への対応措置—①多様な教学、②段階的な教学、③文化的な融合」について説明しました。日本と中国の漢字教育システムには学ぶべき点が多くあり、相互に取り入れることで漢字教育をさらに充実させることができるとでしょう。特に、中国の漢字共通性を最大限に活用することで、日本人の中国語学習や中国人の日本語学習がより効果的になる可能性があります。今後はデジタル技術の発展とともに、より革新的な漢字教育方法が生まれることが期待されます。

第6の発表「異文化理解と主体的学びを育む — iPad と体験学習を融合した韓国語授業の実践」は島根大学外国語教育センターの林河運特任講師のプレゼンテーションでした。林先生は島根大学の韓国語初修クラスで実施した授業実践について紹介します。授業では、iPad を使った効率的な板書と、韓国文化に関する体験学習（韓服の試着、伝統遊び、韓国料理の紹介など）を組み合わせ、学生の興味を引き出しながら、主体的に学ぶ力を育てる目指します。プレゼンテーションの流れは、一「初修外国語教育の概要」、二「iPad 活用授業の工夫と効果」、三「学習者の声・評価」、四「韓国文化体験学習の取り組み」、五「学習者の声・評価」、六「今後の展望」でした。文化紹介や体験学習を重視した授業で、学習者の知的好奇心と主体性を引き出すのは林先生の目標です。

（文責：Neumann Florian）

■保健体育分科会

テーマ：保健体育科目を通してどのようにして学生一人ひとりの多様な幸せ（well-being）を涵養できるのか

ホスト校である島根大学の須崎先生より主旨説明があり、続いて島根大学松江保健管理センターの杉原先生より「学生のヘルスリテラシーの向上を目指して」と題して報告がありました。医療者の立場から新入生に対しての講義を実施しており、一人暮らしを開始した多くの新入生が遭遇する可能性の高い内容を取り上げ、正しい医学的知識だけでなく、予防法や対処法、相談方法の具体的な方法を併せて伝え、「行動できる力」の獲得を目標としているとのことでした。続いて同じく島根大学の原先生より実際の健康スポーツの授業内容について報告がありました。島根大学の健康スポーツⅠの授業は、授業ガイダンス後、「健康な学生生活のために」という2回の講義、8回の実技授業、そして「生涯にわ

たる健康」の3回の講義で構成されていて、講義は対面ではなく Moodle 上でのオンラインディマンド方式を取り入れていました。授業の説明とともに大学生の身体活動量における体育授業の意義についての報告がありました。健康の基本三要素は、「運動」「栄養」「休養」であるが運動以外は本能により制御できるが、運動が持つ楽しさ、爽快感、健康効果は、体験を通して実感しなければ自発的な運動実践は期待できない、そこに「大学体育ができること」の意義が見出されるのではないかとの報告がありました。その後、短い時間ではありましたが各参加大学からの報告、質疑応答が行われました。

(文責：石川雄一)

■日本語・日本事情分科会

メインテーマが「教養教育と総合知の涵養」だった今回、本分科会では「日本語、日本事情教育と『総合知』の接点～現状と今後の展望～」をテーマとして以下3件の報告が行われました。

1. 「遠隔ピア・ラーニングによる学習者主体のキャリア形成教育授業の試み」

大塚薰氏（高知大学グローバル教育支援センター教授）

2. 「レポート作成における留学生の生成 AI 活用」

片桐準二氏（鳥取大学教育支援・国際交流推進機構国際交流センター准教授）

3. 「日本語・日本事情教育と『総合知』の接点～島根大学の実践報告～」

中園博美氏、佐藤智照氏（共に 島根大学外国語教育センター准教授）

1では地元関係者等の協力も得てのオンライン共修授業、2では生成 AI を使用したレポート作成の効果と課題、3では言語学習と社会・文化理解をどう交差させていくかについて、報告や考察が行われました。専門分野の垣根を超え、多様な背景を持つ留学生と日本人学生が共修することによって得られる成果や、学生側・教員側双方が AI をどう活用していくべきか等、様々な現状や課題が共有されました。質疑応答では、地域と連携してのキャリア支援および作文時の AI 活用についての質問が多く、参加者の関心の高さが窺えました。

(文責：塩井実香)

3. よりよい授業のための FD ワークショップ報告

日時：令和 7 年 9 月 4 日（木）～9 月 5 日（金）

場所：幸町北キャンパス オリーブスクエア 2 階 多目的ホール

第 15 回「よりよい授業のための FD ワークショップ」が、令和 7 年 9 月 4 日（木）～9 月 5 日（金）に、香川大学幸町北キャンパスのオリーブスクエア 2 階多目的ホールで開催されました。本ワークショップは平成 22 年より毎年開催されており、本学大学教育基盤センターの教員が講師を務めています。今回は前回を上回る参加者が集まり、15 名（香川大学 14 名、徳島文理大学 1 名）となりました。台風 15 号が接近している中での開催となりましたが、両日とも対面で実施されました。



■プログラム概要 ※GW=グループワーク 1 日目(研修は 8:50～18:00)

- ・オリエンテーション
- ・アイスブレイク
- ・GW I「学生の考えるよい授業」
- ・講義 I「シラバスの書き方」
- ・GW II「全学共通科目の開発 I」
- ・講義 II「学生参加型授業の技法」
- ・ちょい足しトピック
- ・講義 III「よりよい学習評価のために」
- ・GW III「全学共通科目の開発 II」
- ・グループ発表 I「中間発表」

2 日目(研修は 8:50～15:40)

- ・講義 IV「1 回分の授業の立て方」
- ・GW IV「全学共通科目の開発 III」
- ・GW V「全学共通科目の開発 IV」
- ・グループ発表 II「最終発表」

本ワークショップは、授業を担当するにあたって必要となる基礎的な知識と技術を学ぶことを目的としていました。具体的には、授業の構想・設計・実施・評価に関わる一連の過程をグループ作業として体験し、参加者相互の話し合いを経てそれに関する能力を身につけることを目指していました。

本研修のプログラム概要は左の通りです。内容は例年通り、参加者は全員パソコンを持参し、Microsoft Teams などを使いながら、全学共通科目の開発に取り組みました。各グループで、シラバス、授業計画、パワーポイント資料を作成し、発表を行いました。本年度は、異なる分野から構成された 5 名ずつの 3 グループでワークを実施しました。

初日（9 月 4 日）には、グループ毎で着席し、オリエンテーションにて研修の目的や目標確認、スタッフ紹介が行われた後、アイスブレイクでお互いの自己紹介を通して初対面での“緊張”をほぐしました。そして、講義を挟みながら、「学生が考える良い授業」について相互に意見を出し合いグループワークを始めました。講義では、「シラバスの書き方」、「学生参加型

の技法」、「ちょい足しトピック」および「よりよい学習評価のために」について扱われ、それらを基に各グループで授業計画・シラバス作成のグループワークを行いました。今回は、各グループに「水」、「ファンション」、「本／メディア」という全学共通科目のテーマが割り当てられ、どのように授業として展開するのか、じっくりと議論しました。初日ではシラバスについて中間発表を行い、本ワークショップの講師より的確なアドバイスをいただき、2日目に反映させました。2日目（9月5日）の午前中は、初日で各講師陣から指摘された事項を修正したシラバスのブラッシュアップ、またミニ授業（「水」、「ファンション」、「本／メディア」）に向けたグループワークに取り組みました。午後には授業発表を行い、各グループや講師陣を交えて全体でじっくり討議しました。その中で提案された授業内容の良い点や課題を確認し、よりよい授業づくりへとつなげる形で締めくくられました。今回のワークショップでは、アクティブラーニングに必要なさまざまな方略やツールを学び、各参加者が自身の授業運営に活用できる段階まで習得することができました。全体を通して、非常に実り多く有意義なワークショップだったと感じております。ワークショップ終了後には、対面での懇親会が開催され、お互いの情報交換と親睦を深める事ができました。

大学教育基盤センターの教員の方々と、修学支援課の職員の方々のご協力のおかげで、今年度も無事に、充実したワークショップを開催することができました。関係各位の皆様に改めて深く御礼申し上げます。有難うございました。

（文責：中川梓）



4. 注目の FD のご紹介

- 名称：SPOD フォーラム 2025 (SPOD 開放プログラム)
- 開催日時：令和 7 年 8 月 27 日（水）～8 月 29 日（金）までの 3 日間
- 開催場所：徳島大学 常三島キャンパス
- 開催方法：対面開催
- 担当講師：SPOD 加盟校を中心とした講師

四国地区大学教職員開発ネットワーク（SPOD）・徳島大学が主催した令和 7 年度「SPOD フォーラム 2025」が、令和 7 年 8 月 27 日（水）～8 月 29 日（金）まで 3 日間の日程で徳島大学常三島キャンパス・教養教育 4 号館 2 階を中心を開催されました。

今回のテーマは、「学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくり」が掲げられました。学生、教職員が学修者中心の学びをいかに促進できるのか、各プログラム講座をはじめ、シンポジウム、情報交換会等を通じて貴重なネットワーク構築の場、空間となりました。そして、今回は具体的かつ実践的な受講を促す一連の取り組みとして新規に「学生理解・学生支援ゾーン」の枠が設けられました。本学によるプログラム講座の一例を挙げれば、「学生支援のこれまでと最新動向を知り、考える」

（蝶慎一、大学教育基盤センター）、「実践事例から考えるキャリア支援」（原瑞穂・圖子賀津美・篠原佳代、キャリア支援センター）を提供致しました。また、合理的配慮の内容をとりあげた講座も提供させて頂きました。

多くのプログラム講座で定員を超えるような受講者の方々にお集まりいただくなど、好評をいただきました。なかでも上述の「実践事例から考えるキャリア支援」の講座では、事前の打ち合わせやご準備の段階からキャリア支援センターの皆様にご協力をいただき、SPOD フォーラムとしても新しいキャリア支援、教育というトピックスをとり上げることができたことは、大変有意義であったと捉えております。今後も大学教育基盤センターでは、新たな関心を惹きつけることができる実践的な FD を提供してまいります。



（文責：蝶慎一）

■令和7年度 FD スキルアップ講座実施報告

例年開講している FD スキルアップ講座を、令和7年度は以下のとおり実施しました。

講義名：多様化する TA および TF の最新動向と授業での協働

日 時：令和7年9月25日（木）13:00～14:30

場 所：523 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：蝶慎一（大学教育基盤センター准教授）

参加者：4名

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－話し合い・教え合いの技法－

日 時：令和7年9月25日（木）14:40～16:10

場 所：523 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：佐藤慶太（大学教育基盤センター教授）

参加者：6名

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－図解・文章作成の技法－

日 時：令和7年9月26日（金）13:00～14:30

場 所：523 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：西本佳代（大学教育基盤センター准教授）

参加者：5名

講義名：充実させよう！アクティブラーニング型授業－問題解決の技法－

日 時：令和7年9月26日（金）14:40～16:10

場 所：523 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：三宅岳史（教育学部教授）

参加者：6名

講義名：事例から学ぶ問題発見・解決型授業のコツ

日 時：令和7年9月26日（金）16:20～17:50

場 所：523 講義室（幸町北キャンパス）

講 師：小坂有資（大学教育基盤センター特命講師）

参加者：5名

5. 全学共通科目の授業公開報告

令和7年度、全学共通科目では5月に以下3科目で授業公開を実施しました。

■授業科目名：大学入門ゼミ A (7) (8) 「大学入門ゼミ」

■日 時：令和7年5月28日（水）4コマ

■場 所：A404 講義室（農学部キャンパス）

■担当教員：高田悟郎・小林剛（農学部）

■内 容：プレゼンテーションの方法

■履修者数：16名

■授業科目名：ライフデザイン

「多様なライフ・キャリアを考える—男女共同参画の視点から」

■日 時：令和7年5月22日（木）5コマ

■場 所：331 講義室（幸町北キャンパス3号館1階）

■担当教員：塩田敦子（医学部）・黒澤あずさ（ダイバーシティ推進室）

・高木由美子（教育学部）

■内 容：“SRHR（セクシャルリプロダクティブヘルス・ライツ）”を知りましょう

■履修者数：73名

■授業科目名：学問基礎科目「医学」

■日 時：令和7年11月7日（金）1コマ

■場 所：415 講義室（幸町北キャンパス4号館1階）

■担当教員：大島稔（医学部）

■内 容：本邦は他の先進国と比較し、人口当たりの脳死下臓器提供数が少なく、深刻なドナー不足が続いている。一方、臓器提供は大切な方を失った御家族に対するグリーフィングケアの一環として、医療者は適切に選択肢提示することが重要である。本邦の臓器提供の現状と諸問題を考える。

■履修者数：332名



原稿を募集しています。

- ☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。
- ★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。
- ☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援課）までお願いします。